



# 扉【とびら】

宇部市立藤山中学校  
7 月 号  
2018. 7. 20 発行

## 『心がすべての発信源』

校長 海 頭 巖

西日本豪雨で尊い命を亡くされた200名以上の方のご冥福を心からお祈り申し上げますと共に被害に遭われた皆様にお見舞い申し上げます。

宇部市でも大雨洪水・土砂災害警報が発令され、厚東川沿いの地域では避難勧告まで出されるなど、自分たちの身に万が一が・・・と、気を揉んでいましたが、幸いにも被害は最小限に留まり、胸をなで下ろした次第でした。しかし、山口県の東部をはじめ、14府県で200名以上の死者と31道府県で900か所近い土砂災害に見舞われるなど、平成最悪の状況となってしまいました。被災地の人たちの惨状をテレビ等で見ると胸が痛み、目頭が熱くなってくるのは私だけではないでしょう。

一昨年この時期に、熊本震災で大きな痛手を受けた益城町の益城中学校と木山中学校へ、生徒会を中心に募金活動を行いました。集まったお金と生徒会からのメッセージを後日現地に届けさせて頂きました。昨年も募金はしなかったものの、生徒会からのメッセージを届けるなどし、二校の生徒たちにたいへん喜んでもらい、また感謝の気持ちも頂きました。

文科省によると、7月16日の時点で、西日本豪雨で被災した小学校は167校、中学校は103校。道府県別で最も多いのは岡山県で53校。次いで広島県39校、京都府35校、愛媛県31校でした。藤山中学校の生徒が楽しんだ全校クラスマッチ（ドッジビー）をしていたころ、被災地の小・中学校の生徒たちはどう過ごしていたのかと思うと胸が苦しくなってきました。被災地のことばかり考えて、自分たちの生活がままならないようではいけません。しかし、被災地のことは決して忘れてはいけず、被災地の人たちのために自分たちができること、喜んでもらえること、手助けできることを考え行動を起こさなければならないと思っています。

さて、今回の豪雨の報道を見聞きする中で、「数十年に一度の大雨」「50年に一度の大雨」「経験したことのないような大雨」「歴史的な豪雨」といったこれまであまり耳にしたことのない『大雨』の凄まじさを表す言葉が次々と流されました。一方、梅雨明け後の今は「猛烈な暑さ」「35℃以上の猛暑日」「体温より高い気温」「命に関わる危険な暑さ」「40℃以上を観測」「危険な暑さ」など『暑い』をより強調する言葉が頻繁に使われています。このような『刺激の強い言葉』を何度も耳にする中で、「またか」「また！」と、その言葉に慣れてしまうことが最も怖いことだと思います。大切なことは、「歴史的な豪雨」や「命に関わる危険な暑さ」といった言葉を聞いたときに、「大変な状況だ、危険な状況が迫っているのだ」という認識と、大変さや危険な状況を強くイメージしていく力を付けていくことだと思います。

『温かい心が温かい行為になり、優しい思いが優しい行為になるとき、心も思いも初めて美しく生きる』の言葉にもあるように、これから私たちには何ができ、何をしなければならないのかを皆で考え、行動に移さなければならないと強く思うのです。『心がすべての発信源』なのですから。